

令和六年四月吉日初版発行

真理にもとづいた批判力

高嶋善三郎

目次

- 真理にもとづいた批判力・・・・・・・・・・・・・ 3
- 業想念を本心の光の中に融合させ、光に還元する・・・・ 4
- 感情移入だけでは正しい愛の現わし方にならない・・・・ 5
- 他人の怒り、悲しみ、苦しみを手放す・・・・・・・・・・ 7

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

よりの分かります。ご了承ください。感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせください。

（スマホ） 090-3334-66619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

真理にもとづいた批判力

人類即神也の宣言文に、「いかなる地球上の出来事、状況、ニュース、情報に対しても、又、人類の様々な生き方、想念、行為に対しても、且つ又、小智才覚により神域を汚してしまっている発明発見に対して、さえも、これらすべて「人類即神也」を顕わすためのプロセスとして、いかなる批判、非難、評価も下さず、それらに対して何ら一切関知せず」がありますが、「いかなる批判、非難、評価も下さず」について、もう少し詳しく説明してください。私たちが受けた教育では、間違っていることは、指摘し、正していくことが、お互いの進歩になると教えられてきました。この言葉をどのように理解したらよいのでしょうか。教えてください。

それでは、五井先生のお言葉にもとづいて、整理してみましよう。まず、批判、非難、評価について、事典などではどのように説明されているかみてみましょう。

批判とは、ものごとの真偽や可否を検討して、それに対する判定を

下すという意味で、他の言動に対しその誤りや欠点を指摘し、正すよう求めることといった解釈になります。一方非難とは、他人の欠点や犯した過ちを指摘し、責めることを意味します。また、評価とは、善悪、美醜、優劣などの価値を判じ、定めることとなっています。

いかなる批判、非難、評価も下さずとは、主に二つの解釈が考えられます。

まず、一つ目は、何も批判、非難、評価もせず、無批判にただ受け入れるというものです。

もう一つは、批判、非難、評価もできるが、すべては人類即神也（神聖）顕わすプロセスであり、それらの現象に把われず、手放していけば、神聖を顕わしていけるという、真理にもとづいて、言葉や行為としてあえて指摘しない。

これらを考えていく上で、参考になるのが、『神への郷愁』の批判と悪口」における五井先生のお言葉です。

「宗教の道とは、ただ無批判になんでも善なりと観ることはない。宗教の道に入れば、入るほどハッキリした批判力が出てくるのである。心が馬鹿のように無批判になるのではない。直感的批判力をはつきりもちながら、その批判力さえ消えてゆく姿と観じてゆくことに、

はじめて空(くう)なる境地が展(ひら)けてきて、空即是色(くうそくぜいしき)といわれる、眞実の世界がその人の世界となって来るのである。人の悪口を言わぬことは勿論よいことだが、一切の批判力を失わせるような宗教を、私は是とするものではない。智と直感とが全く一つになってこそ、眞実の世界が現われてくるのである。」

これから整理しますと、先に示した二つの解釈の内では、後者の解釈になります。しかし何も批判、非難、評価もしないのは、眞理をはっきり把握することが前提になると言われているのです。

ここでいわれる眞理とは、「この宇宙は、すべては大智慧、大能力のある中心者によって動かされているものであって、大宇宙の星辰から人類、動物、山川草木、あらゆる存在が大調和の法則によって自らが保たれている」ということであり、「各自が己の置かれた立場において、大宇宙の運行に沿って働いている」という大原則によって運行されているのである。この法則に背(そむ)けば、その存在者は(自ら)消滅してゆくより仕方がなくなるのである。それはこの顕れの世界のことばかりでなく、人間の五感に触れぬ他の波動の世界においても同じ法則によって動かされているのである」と解説されています。

またいかなる地球上の出来事、状況、ニュース、情報は、人類の誤る想念(業想念)やこの地球を滅ぼそうとする想念が、地球を救済しようとしている守護の神霊団によってその90パーセントが修正され、この世界に現わされて消えてゆこうとしている姿であり、あと10%の業想念については、人類の代表である神人の私たち自身で眞理につながり、本心の光の中に融合させ、光に還元し、修正しなければ、私たち自身の魂は磨かれず、業想念を新たにつくってしまうのです。守護の神霊がせっかく修正してくださったものまでも無駄にしてしまうことになるのです。

言い換えれば、今生の肉体的体験により得た分別心にもとづき、批判、非難、評価をしても、人類の眞の救済にはならないということなのです。

業想念を本心の光の中に融合させ、光に還元する

では、私たち自身で眞理につながり、業想念を本心の光の中に融合させ、光に還元し、修正するには、どうすればできるかについて、考えてみましょう。

これについては、拙書資料『神我一体観、自他一体観を体験として表現する』において七項目にまとめて整理しております。それについて項目の見出しだけを改めて見てみましょう。

第一に本心の本質とその働き方を理解することです。それによって本心を自分のものとすることが出来ます。

第二にすべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎたいことです。これを常にスムーズに行っていくためには、愛と感謝の心についてはしっかり理解することが大事です。

第三に、分別することにより、焦りや心配になり、肉体頭脳の小智才覚をめぐらさないことです。

第四に現在の自分の運命や環境は、その内80%が過去の想念による結果ですが、あと20%は今の自分の想念のあり方に任せられていることを理解する必要があります。

第五に消えてゆく姿は宇宙の真理を認識できた時、消えてゆく姿(肉体のない存在)に近づきます。そのすなわち、業想念は光に還元されていくのです。

第六に愛の現わし方を習得する必要があります。

第七に、自分の周りにいる、善良と思われる人たちから神に通じない(肉体人間観の)評価基準を無意識のうちに受けとめてしまうことは極めて危険であることに気付く必要があります。

感情移入だけでは正しい愛の現わし方にならない

ところで、これらを実践していく上で、最も課題になる点について法友と整理しましたところ、「消えてゆく姿で世界平和の祈りや印によって私たちが救われてゆくことは、頭では分かっているが、いろんな感情想念が自分から離れないという現状をどうすればよいか」でした。み教えを長年実践してこられた方もまた最近実践されはじめられた方も共通する項目です。

五井先生、昌美先生の著書をあらためて見直し、整理しますと、自分に襲ってくる暗黒想念(怒り、悲しみ、苦しみ等)には、大まかに分類すると、二通りあるようです。

一つ目は、この世の中の悲劇的出来事や、自分の周りで病气や貧乏などで苦しむ人々に対する、過剰な同情、感情移入により引き起こされるもので、正しい愛の現わし方と錯覚した想念行為によるものです。

もう一つは、自分の周りにいる、善良と思われる人たち、特にマスコミから神に通じない（肉体人間観の）評価基準を無意識（無防備）のうちに受けいれてしまい、それに把われ、心を乱すものです。

一つ目のものは、とても思いやりがあり、人の苦しみ、悲しみ、怒りを敏感に受けとめられる方で、少しでも、「自分の祈りにより癒してあげたいと思う方に多いことに気付きます。

人の悲しみ、痛みを一緒に感じ、それらを半分にしてあげ、喜びはともに喜び、倍にしてあげようというところでしょうか。

この思いやりのある想念行為は、愛深い行為ではなく、実は自分だけでなく相手もだめにしてしまうと言われているのです。

昌美先生の著の『真理―苦悩の終焉』において、昌美先生は、

「人は、当の本人自身の苦しみだけでも十分であるのに、家族や友人など自分の周りの苦しみまで背負い込んで苦しんでしまう。感情移入によって共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うべきと勘違いしてしまい、正しい愛の現わし方（光を与え合うこと）ができなくなるのである。

それはなぜかということ、「感情移入した分だけ、自分の生命エネルギー

ギーを無駄遣いしているのである。周りの苦しみから自分を切り離すことができたなら、自分の新鮮な、迷いのない生命力溢れたエネルギーが愛の心となって、癒しの心となって向けられ、いつまでも解決のめどがつかなかった苦しみに別れを告げ、もう永遠に、苦しみ、悩みに追いつまれないことがなくなり、その瞬間から真理への目覚めが始まり、それ以上苦しまなくても済むようになるからである。」と。

このお言葉のように、周りの苦しみから自分を切り離すことが、自分のためにもなるし、他人のためになるといわれているのです。

さらに「真理に目覚めていない人は、なんでもかでも自分の悩みや苦しみとして受け止めてしまいが、真理に目覚めた人は、何もかも喜びとして受け止めてゆくのである。そこに人生の明暗の分岐点がある。

なぜ喜びとして受け止めることが出来るのか、それはいつも必ず自分の心身と神と一体化しようとしているからである。無限なる愛、無限なる喜び、無限なる能力、無限なる幸せにならんとして努め、自分の肉体を神の光輝く器にしようとする喜びに溢れているからである。」と。

とても厳しいお言葉であるが、よくよく考えると納得でき、そこに新しい希望を感じます。

「人類即神也」の宣言文にある「いかなる批判、非難、評価も下さ

ず、一切関知せず」にも、通じるものであり、今この世界情勢に感情移入しないで、ひたすら祈り、印を組むことが、世界平和実現のために最も貢献できる生き方と言えるのです。

他人の怒り、悲しみ、苦しみを手放す

では、日々どのように取り組んで、自分に襲ってくる暗黒想念の感情想念を取り払えばよいのでしょうか。

私たちが犯しやすい点は、これらの暗黒想念を己の想念の念力で取り払おうとすることです。それは、過去私たちが何度も挑戦し、成し得なかったことなのです。五井先生は、私たちの天命完うさせるために働いて下さっている守護の神霊の力を借りて、私たちの生命の親である、親神様（直霊）の光のなかに手放すことを教えてくださっています。

そこで、自分の守護霊様や自分の神聖に意識を向けて、「私は、他人の怒りや悲しみや苦しみを手放します」と三回宣言する。この方法を実践していくうちに、これらの暗黒想念を手放すことが容易く出来、

神聖の働きを実感できるようになり、神聖は私達の意識行動と密接につながっていることに気付くのです。

私達が何を選択するか、また何に意識を集中するかによって、それらを実現するために瞬時にエネルギーを注いでくれるのです。良い選択等をすれば、いい結果が実現され、一方神のみ心から離れた選択等をすれば、不調和の姿をそのまま現わしてくれるのです。

また先に言及しましたが、もう一つの種類の想念も、同じように「私は、他人の怒りや悲しみや苦しみを手放します」と三回宣言することにより、手放すことが出来ます。

この取り組みを通して、人それぞれの感情を感じてその人の気持ちを理解すること、その感情に移入してしまって、自分の感情を乱すことは、全く別ものであることが実感できるものになります。

相手がどのような感情を自分にぶつけて来ても、振り回されることもなく、相手の心を鎮（しず）めることが出来るようになるのです。

私たちは、常に神聖に意識を向け、自分の感情想念を神聖の明るく、清らかなびびきで一杯しておきたいものです。